

病害虫の同定診断、生理障害等の診断

～活躍しています、野菜・花・稲のお医者さん～

農業試験場では試験研究を実施するとともに、現場からの依頼による病害虫同定診断や生理障害等の原因解明を行い、対策の指導を行っている。ここでは、平成 25 年度に生産者から依頼のあった診断の概要について紹介する。

1. 病害虫

診断は、病害虫の検出や被害部からの推測により行うが、病害虫が認められず、被害をもとに推測する場合もある。微小昆虫や病害では顕微鏡観察が必須であり、後者では病原菌の分離や、接種による病原性の確認を必要とすることも多い。また、現場の状況を調べる必要の生じることもあり、診断には多大な労力を要する。

病害虫の診断同定依頼は 294 件で、全体の 79% を占めた。その半数以上が野菜類に関するもので、ショウガが 31 件と最も多く、根茎腐敗病に関するものが主であった。トマトは 30 件とショウガと同程度で、イチゴも 16 件の依頼があった。花きでは、キクが最も多く診断されており、持ち込まれた株がキク茎えそウイルス (CSNV) によるキク茎えそ病の発病株であったことが判明し、本県での発生を初めて確認した事例もあった。この他にはスターチス、トルコギキョウ等

の診断も行った。水稻では、前半には育苗中に発生した病害や縮葉枯病、後半には開花期の低温多雨により、内穎褐変病が多発したことに伴って、本病の被害と診断された事例が多かった。

このように、病害虫では例年と同様に病害の診断が主体であった。

2. 生理障害等

生理障害、土壌等に関する診断は全体の 21% であり、病害虫と同様に、野菜類に関するものが 49 件と最も多かった。

野菜ではトマトが最も多く、養液栽培で認められた障害では苦土、鉄欠乏症が発生し、単肥の施用割合が適切でなかったためと推測された。この他には尻腐症も多くみられた。花きでは農業試験場近隣に産地のあるスプレーギクの障害が多く、花壇苗の持ち込みもあった。

以上のように、病害虫の同定診断や生理障害等の原因解明を行い、適切な対策を示すことで、本県の野菜、花き、水稻の安定生産に貢献している。また、これらの他にも、栽培管理、農業経営などの技術指導を各振興局農業振興課等の普及機関と協力しながら実施しているので、生産者にご活用いただきたい (島津 康)。

表 平成25年度の病害虫、生理障害等診断件数

	病害虫	生理障害等	合計
野菜	215	49	264
花き	48	20	68
水稻	31	9	40
合計	294	78	372



根茎腐敗病罹病ショウガ